

市民文芸

歌壇

岩崎 聰之介 選

かそかにも天地の恵み享くるらし屋敷畑に夏
な清しき 大槻 とよ
深山の若菜に包まるる岩清水ふき葉に飲め
ばうまさ身に沁む 後藤今朝雄
温泉場に客呼びたしと草を刈る夫に労いのク
ラクシオンひびく 鈴木 茂子
鳩に餌を呉れをりし人逝きしとや妻を送りて
独りなりしが 石田みどり
代替に蒔きし麦の穂朝日受け見渡す限り刈り
取りを待つ 平間 久子
一陣の風に愛でられピラカンサ吹雪の如く花
びら降らす 寺崎 悦子
氣勢あげみこしかついで三十年若者会は今年
解散 四電 英夫
新緑をサナトリウムのボランティア妹と二人
老いを忘れて 高子うこん
きぬさやは香り豊かにおくぶくと嫁の里から
いただきしもの 鈴木久美子
我が家の垣根を越えし竹の子や一夜明くれば
皮を脱ぎけり 遠藤 行夫

【評】一首目、「夏な」は夏季に食べる菜類の
総称、下の句が具体的でいい。日日を感謝し
て生きる作者が居よう。

【評】二首目、山歩きに見つけた岩清水。露のこ
つプが、即うたになる楽しさ。
三首目、夫の作業をあたたく目守る眼が
思いがけず捉え得た場面。

俳壇

遠藤 秋尾 選

卵の花の離るる時に匂いけり 服部 忠孝
母の手を借り母の日の料理かな 山部 弘子
短夜や寝ても眠たき朝の雨 岩松 隆志
夏木立見えかくれゆく郵便車 制野 リエ
来客に先づは冷やせし水羊羹 岩澤 伍峯

【評】一首目、「夏な」は夏季に食べる菜類の
総称、下の句が具体的でいい。日日を感謝し
て生きる作者が居よう。

【評】二首目、山歩きに見つけた岩清水。露のこ
つプが、即うたになる楽しさ。
三首目、夫の作業をあたたく目守る眼が
思いがけず捉え得た場面。

柳壇

四電 英夫 選

ウーメンが喉をつるりとゆく暑さ 大庭 良子
豊かさに慣れ一食の幸を知る 草野 清
医師不足天使のはしこいつ見える 遠藤 行夫
病院としばし無縁をうれしがり 高子うこん
病名に老人性付く歳となり 水戸 光穂
口げんかしつとも支え合う二人 寺崎 悦子
大地震高齢者には逃げ場なし 梶川善二郎
避難訓練昔空襲今天災 阿部はぎの
鋤鎌を手に学問の百姓道 斎藤 典子
かすむ目を勞り励まし小物縫う 阿部みさ子

【評】一首目、卵の花は「空木の花」とも言う。
風向きで少し離れた所までふつと匂ったとい
う様を一句に。白い小花と、その匂いまでも
伝わってくる。
二首目、母の日の祝いの料理を作ろうとし
て、結局は母の手を借りるはめになってし
まったという一句。母と子の温かい交わりを
描いた佳句である。
三首目、雨の朝の眠たさを、「短夜」の季
題を使って表現した一句。中七の「寝ても眠
たき」が良い。

【評】一首目、暑くなるとあっさりしたものが
欲しくなる。うーめんや、ところんはその
代表。喉ごしのうーめん暑さを表現したの
は言い得て妙。
二首目、食べ物があふれる飽食の時代。し
かし、食卓に乗るまでの苦勞を忘れてはなら
ない。感謝の気持ちで残さず食べたいもの。
三首目、全国的な医師不足。生命に直結す
るだけに問題は深刻。救いのしこを掛けて
くれる天使は現れるのか。

七夕

風間市長の風のことわざ

天の川の兩岸にあるけん牛星わ
し座のα星アルタイル、ひこ星
と、織り姫星(こと座のα星ベ
ガ)が年に一度会うという星の
お祭りです。中国伝来の乞巧奠
の風習と、日本の神を待つ「た
なばたつめ」の信仰とが習合し
た行事ではないかと言われてお
り、奈良時代から行われて江戸
時代に庶民の間に広がったよう
です。庭先に供物を上げ葉竹を
立て、五色の短冊に歌や字を書
いて飾り付け、書道や裁縫・技
芸の上達を祈ったそうです。
私も七夕の時には願いを込め
てよく短冊に書いたものです(書
道や技芸は上達しませんでした
が)。今は「白石の人口が
4万人に復活しますように!」
や「まちが安全・安心でありま
すように!」などの願いを込め
ています。「夢を書いておくこ
とは実現への第一歩」と何かの
本に書いてありました。皆さん
も短冊に願いを書いて飾り、季
節の行事を楽しんでください。
これからますます暑
くなりますが、健康、
火の元、交通には細心
のご注意を。また、良
き涼の取り方を存じ
でしたら、ぜひ教えて
ください。
話は変わりますが、
左腕投手のことをなぜ「サウス
ボー」と呼ぶのか、皆さんご存
じですか?
【7月号の答え】
「人の噂も75日」の語源は諸説
ありますが、「二十四節気」とい
う季節の区切り方に由来すると
の説が有力です。一節気は15日
ほどで、五節気の75日が過ぎる
と別の季節になることから、噂
も忘れ去られるのだらうと、こ
の言葉が生まれたとする説です。



国際コーナー

International Corner

「料理を愛する国、日本」

テレビのスイッチを押すと、おいしそうな料理がしばしば画面に登場します。それが、私が知っている「日本」の一つの姿です。芸能人お勧めのレストラン紹介番組や、芸能人のふるさとのお店を訪問して紹介するような番組が毎日、各局で放映されています。こういった番組は食べ物だけでなく、試食する芸能人のリアクションやトークが面白いのですが、日本に来た時から、なぜ他人の食べている姿を番組の中心に据えるのだらうと、ずっと不思議に思っていました。
日本の料理番組は、オーストラリアには存在しない娯楽番組です。母国では、料理の作り方を教えるものと、レストランの料理対決のような番組しか見たことがありませんし、また、芸能人がそういった番組に出ることはめったにありません。このような違いは、国民の料理に対する気持ちの違いを表しているのかもしれませんが、それ以上に、オーストラリアでは他人が食べる姿や、そのリアクションを番組に取り入れても、見る人があまり盛り上がりません。このため、店はその位置取りや場所、そして宣伝で生

きています。「芸能人が行ったから、私も試してみたい」という人は少なくないと思いますが、テレビではそういった宣伝はしていません。また、オーストラリアでは、国内の芸能人はハリウッドスターと比べて位置付けが低いというか、そこまでは偉いと思われていないことも、多少影響しているのだらうと思います。
テレビや宣伝の話はどうであれ、色の取り合わせといった見た目から、だし汁の取り方に至るまで、日本人は本当に食べ物を大切にしていることが、海外の人にも伝わるとおもいます。
また、一日の食事に、たくさんのおかずや野菜を取り入れるのも、日本独特の考え方ではないかと思えます。オーストラリアでは、朝食はコーンフレークやオートミール、ランチはサンドイッチという方が比較的多いので、日本に来て初めて弁当を食べる時は、本当に喜びます。きっと日本人は「食べ物に恋している」のでしょう。そうでなければ、これほど豊富な種類の、おいしく健康に良い料理の数々は生まれなかったでしょう。だからこそ、こういった料理をおいしく食べて幸せになりましょう!

まちの話題

～あの日、あの時～

平成20年度人権啓発花いっぱい活動

7月4日、南保育園で「平成20年度人権啓発花いっぱい活動」のスタートとなる種まき作業が行われました。この活動は、花を育てることを通じて、命の大切さや思いやりの心を学んでもらおうと、市内に8つあるすべての保育園で行われたものです。とても暑い日となったこの日は、年長組の園児15名と人権擁護委員(※)の皆さんが協力して、小さな「秋咲きコスモス」の種を一つひとつ、栽培用ポットに一生懸命まいていきました。
園児たちが大切に育てた「秋咲きコスモス」や「越冬パンジー」などの花々は、10月から開催される仙台・宮城デスティネーションキャンペーンに合わせて約400のプランターに植え換えられ、9月下旬ごろに白石蔵王駅や白石駅、駅前商店街などで飾る予定になっています。



▲種をまいた栽培用ポットに水を掛ける園児たち
※法務大臣が委嘱した民間の方。さまざまな分野の人たちが地域内で人権の大切さを広め、人権が侵害されない社会をつくろうと設けられた、諸外国には例のないもの。